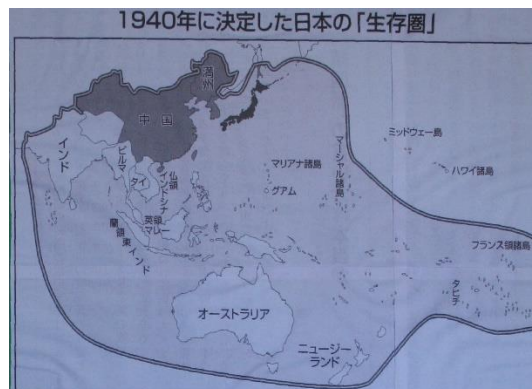


アジア支配をめざす「大東亜共栄圏」

侵略の正当性「大東亜の新秩序建設」とは、

1940年(昭15)7月に近衛文麿内閣によって発表、宣伝された構想です。日本が、欧米勢力の植民地支配から「アジアを解放」して「八紘一宇」(世界を天皇のもとに一つの家とする)の「大精神」のもとにアジア諸国民がともに栄える「大東亜共栄圏」を実現させる、というものでした。

日本の支配圏に組み入れようとした領域を日本の「生存権」として、これだけの地域を支配すれば、日本が戦争を続けるのに必要な物資はすべて手に入る、という勝手な理屈で、そこに住んでいる人々の生活の権利などはまったく問題外でした。「大東亜共栄圏」とは、侵略を正当化する宣伝のスローガンであったことは明らかです。



太平洋戦争の開戦直前の1941年(昭16)11月、大本営政府連絡会議は、「南方占領地行政実施要領」を決定し、日本軍が占領する東南アジア地域に対する基本方針をしめました。

アジア諸国から資源の収奪

その内容は占領地に対する軍政を実施して、治安を回復し、重要軍事資源を急いで獲得し、日本軍が自活できるようにする、というものでした。自活とは、食料をはじめ日本軍の維持、活動に必要な物資



資を日本本国から送らず、現地で調達するということです。当時の天皇も出席した御前会議や政府・軍部の諸会議の記録を見ても東南アジア諸国の国民の生活問題などを心配する話は何一つなく、出てくるのは、どこを占領したらどんな物資



が手に入るか、という資源の話ばかりです。コメは仏印(ベトナム)とタイ、石油は蘭印(インドネシア)、ニッケルはセレベスとニューカレドニア、ゴムはタイと仏印と蘭印、錫はタイと仏印、銅はフィリピンなどなどです。以上に見たように、欧米列強に代わった日本の占領地では、「大東亜共栄圏」とは名ばかり力の調達を目的にしたものでした。



大東亜会議 1943年11月、東条英機首相は、アジアに新しい秩序が形成されたことを誇示するために「大東亜会議」を開きました。招集されたのは、日本軍が占領している地域につくられたカライ政権、すなわち「満州国」、中国・南京の精衛政権、タイ、ビルマ、フィリピン、「自由インド仮政府」の代表たちでした。「大東亜会議」は、日本の領土拡張と他国支配の隠れ蓑でした。(写真は『写真記録 日中戦争』5巻ほるぷ出版より)

写真右上 船に積み込まれ、日本に送られる。写真右下 大連埠頭に野積みされる農産物、安く買いたたかれた。(写真は写真記録日中戦争』1巻 ほるぷ出版より)